

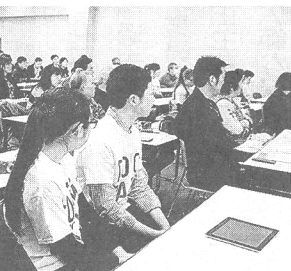
2.11を生きる

東北復興の日

三月十四日から五日間、仙台市内に約十五万人が集まり、国連防災世界会議が行われました。それに伴って多彩なフォーラムが開かれ、東日本大震災の教訓や復興の現状が世界に発信されました。高校生の私も「市民協働と防災」のテーマ館に「TOMO DACHIから宮城へ 宮城から世界へ」という名前で出



137



宮城県宮城野高校3年 佐藤望叶(もか)さん



高校生の挑戦 反響呼ぶ

活動を続けています。震災を経験し、多くのことを学んだ私たちは、目の前にある課題を放っておけないのです。高校生にできること、高校生にしかできない活動に挑戦

上りました。フォーラムでは、福島県相馬高校放送局の高校生と出会い、夏に原発事故をテーマとした演劇やドキュメンタリーの上映会を仙台で開く計画が持ち

展しました。写真。

風評被害緩和のための農作物販売、高校生のための情報誌制作など、被災三県のさまざまな分野で地域貢献活動をして

ている高校生八団体が発表。海外の方も含めて県議会議員や行政関係者ら約百二十

人に聞いていただきました。震災後、私を含めて、地元

のために活動している高校生は勉強や部活の合間を縫って

する思いを、たくさんの方の前で発表し、励ましの声を

いただいたり、新たに支援をしてくださるとい

う方に出会ったりしました。国連防災世界会議への参加は得難い経験となり

ました。会議でも防災活動をしている全国各地の高校生や、政府

や世界で活躍する大人とのつながりができました。「私たちが伝えたいこと」というフ

PO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

愛する地元、仙台。震災後、雇用や福祉、過疎など多くの課題が浮き彫りになりましたが、それはまさに日本の縮図であり、震災以前からあったものなのだ、と感じています。

だからこそ、元通りではなく、より住みやすい街へ。明治維新のきっかけとなった海援隊、松下村塾のように、私たちが社会の役に立ちたい。その一心で、これからも前に進んでいきます。

この連載は、東京のN